

2025.07.10 ヨリミチ部 インサイト・レポート
(ChatGPT o3 pro を使用)

ローカルとグローバルをつなぐ価値

～楽しいから、つながれる。つながるから、変わっていく。～

ファシリテーション&編集：
一般社団法人 Creative Guild ギルドマスター
渋谷 健

ゲストスピーカー：
Glokyo ファウンダー アレックス・ナイ
事業創造コーディネーター 山口 郁子
東京みなと人力車 田中屋 代表 田中 宏典

※ヨリミチ部インサイト・レポートについて

本レポートは、港区立産業振興センターが実施するコミュニティ形成プログラム「ヨリミチ部」のゲストセッションをもとに、登壇者の語りや参加者との対話から生まれた気づきを再構成した記録です。

ヨリミチ部では毎回テーマを設定し、異なる世代・地域・文化背景を持つ実践者をゲストに迎え、多様な視点を交差させながら、未来の共創につながる対話を重ねています。本レポートは、そうした現場で生まれた発言や感情、沈黙や違和感といった“暗黙知”も含めて丁寧に掘り下げ、AIを活用して文章化・構造化したものです。

単なる議事録ではなく、「今ここで起きた問いの往還」を後から読み解き、共有可能な“共創知”として言語化していくことを目指しています。登壇者や参加者の内省を広く開くことで、読者一人ひとりが「自分ごと」として受け取り、自らの“楽しい”から始まる未来づくりにつなげていただくことを願って作成しています。

【エグゼクティブ・サマリー】

本レポートは、2025 年 7 月に開催された「ヨリミチ部」の対話イベントをもとに、“ローカルとグローバルをどうつなぐと楽しくなるか”という問いに向き合い、多様な視点からその可能性と条件を探ったものである。

登壇した田中氏（観光実践者）、山口氏（都市と地方を往還する生活者）、アレックス氏（越境的ビジネス支援者）の語りを通じて、「ローカルとは地理ではなく、日常を語る記憶と関係性のネットワーク」であり、「グローバルとは遠くの世界ではなく、違う文脈を持つ他者と出会うことで自分を編み直す経験」であることが明らかになった。

人力車体験や歩行型ダイアログなどの事例からは、「つながり」は観光でも交流でもなく、“共有された生活感覚”を通して生まれるものであることが示された。一方で、言語不安、文化の表層化、観光公害など、接続の難しさや抵抗感も可視化された。

それでもなお、対話を重ねた末に見えてきたのは、ハイブリッドな文化創造や多中心型のメッシュネットワークという新しい社会像である。その鍵となるのは、失敗を許容する余白（White Space）、媒介者＝コンダクターの存在、小さな共創を回すマイクロプロジェクト、そして“楽しい”という感情を起点にした行動設計である。

本レポートは、つながることを“構造”としてでなく“習慣”として捉え直す提案でもある。今、私たち一人ひとりが問われているのは――

「あなたにとっての“ローカル”とは、どこにありますか？」

「その物語を、誰と、どう共有したいですか？」

「その先にある“グローバル”は何を可能にしますか？」

この問いを携えて、まずは自分の半径 5 メートルから、楽しく、軽やかに動き始めることが、未来を変える確かな一歩になる。それは確実に新しい可能性の扉を開く大きな価値となる。つまりは社会変容の起点となるのだ。

目次

0. プロローグ：この問いはどこから来たのか？	5
0.1 イベント概要と開催意図	5
0.2 なぜ今、“ローカルとグローバルをつなぐ”のか	5
0.3 このレポートが目指すこと	6
1. 視点を揃える	7
1.1 ローカルとグローバル——対立ではなく、往還	7
1.2 分析視点と方法論	7
1.3 用語と定義	8
2. ローカルに眠る価値	10
2.1 ローカルの本質：文脈資本と関係性の網	10
2.2 現代との接続と摩擦	11
2.3 “私にとってのローカル”という感覚	12
3. 越境がもたらす問いと揺さぶり	13
3.1 外部との交差が生む可能性	13
3.2 つながることへの怖れと抵抗	14
3.3 マインドセットの越境——“違い”の中で再構築される自分	15
4. つながった先に見える風景	16
4.1 多中心ネットの台頭：メッシュ型世界観	16
4.2 ハイブリッド文化の創造	17
4.3 新しい社会の条件	18
5. 価値を橋渡しするしくみ	19
5.1 余白と受容の設計	19
5.2 ローカルの媒介者＝コンダクターの育成	19
5.3 接続のツール群：低ハードル化の鍵	20
5.4 小さな共創を回す：マイクロプロジェクト運営	21
5.5 信頼とリスクの両立	22
6. 物語を“わたし”のものにする	24

6.1 個人ができることから始める	24
6.2 コミュニティと組織に宿る変容の種.....	25
6.3 “楽しい”から動き出すために	26
7. つながりを経営させるために.....	28
7.1 核心の再確認——“文化”と“関係性”の再定義	28
7.2 今後の展望と問いの継続	28
7.3 このレポートを読んだあなたへ	29
巻末資料：参考資料・文献一覧.....	30

0. プロローグ：この問いはどこから来たのか？

0.1 イベント概要と開催意図

2025 年 7 月 10 日、港区率産業振興センターにて、「ヨリミチ部」の定例イベントが開催された。

「ヨリミチ部」は、地域に根ざす人々と、多様な価値観や背景をもつ参加者たちが、立場を越えて語り合い、未来の共創の可能性を探る“対話の実験場”である。名前の通り、日常の本筋（メインストリーム）から少し“寄り道”することで、新しい視点に出会い、予定調和を超える発見が生まれる場を目指している。

今回のテーマは、「世界と地域をどうやってつないだら“楽しく”なるか？」。この一見ゆるやかで遊び心のある問いの背景には、観光、国際交流、文化継承、地域経済、移動といった複雑に絡み合う社会課題がある。

本セッションには、港区で人力車観光を営みながら日本文化を体験として届ける田中氏、地方金融機関出身でセカンドキャリアとして地域と関わる山口氏、そして NY 出身で 20 年以上日本に暮らし、SME の海外展開支援に携わるアレックス氏ら、実に多様な立場の語り手が集い、それぞれのローカルとグローバルの接点をめぐって濃密な対話が交わされた。

来場者は地元住民、学生、観光関係者、外国籍の参加者など年齢も国籍も様々で、多言語環境にも対応。会場にはリアルとオンラインの両方から参加があり、同時通訳や QR コードを用いた意見収集ツールも駆使され、“多文化・多世代・越境的な共創”が実践された。その中で自然に生まれた問いと対話の蓄積をもとに、本レポートは編まれている。

0.2 なぜ今、“ローカルとグローバルをつなぐ”のか

2020 年代後半、日本は未曾有のインバウンドブームに直面している。観光庁の発表によれば、2024 年の訪日外国人数は過去最高の 3,690 万人に達し、2025 年もすでに年間 4,000 万人超が視野に入る状況だ【観光庁, 2025】。

その一方で、富士山の登山者規制に象徴されるように、観光過多による地域負荷（オーバーツーリズム）や文化の表層的な“商品化”も進み、「つながる」こと自体への疑問が生まれている。

しかし、つながりは悪ではない。本来、人と人、文化と文化が交差することでこそ、新たな物語が生まれ、既存の価値が問い直され、社会は進化する。重要なのは、どうつながるかであり、誰がその媒介となるかである。

この局面で“楽しくつながる”とは、ただフレンドリーに交わることではない。異なる価値観や生活文化を尊重し合いながら、自らの「日常＝ローカル」を、他者の視点で見つめ直すという知的・感情的な冒険なのだ。

0.3 このレポートが目指すこと

本レポートは、7月のヨリミチ部における参加者の発言、対話の流れ、空気感、そして無意識のうちににじみ出た“語られなかった想い”をもすくい取りながら、「ローカルとグローバルの交差点にある価値とは何か？」という問いに応答するものである。

ここで扱う“ローカル”とは、地理的な範囲ではなく、語るに足る日常性であり、自分の暮らしの中で“物語として語りうる”価値の源泉を指す。一方“グローバル”とは、外の世界のことではなく、“異なる文脈を持った誰かとつながること”によって自己が変容する経験のことだ。

本稿では、実際の参加者の語りや事例をふんだんに引用しながら、「ローカルに眠る価値」「越境の意味」「つながることで起きる変化」「そのために必要な仕掛け」などを体系的に整理していく。そして最後には、読者自身が自らの“ローカル”を再定義し、“誰かとつながる行動”に向けて一歩踏み出すためのヒントと後押しを提示することを目指す。

「あなたにとっての“ローカル”とは、どこにありますか？」

「その物語を、誰と、どう共有したいですか？」

「その先にある“グローバル”は何を可能にしますか？」

1.視点を揃える

1.1 ローカルとグローバル——対立ではなく、往還

「ローカル」と「グローバル」はしばしば対立概念として語られがちだ。地元と海外、伝統と革新、個と全体。しかし実際の社会や個人の経験においては、両者はむしろ“行き来”し続ける関係にある。グローバルな経験は、ローカルの日常を相対化し、新たな意味づけを可能にする。一方で、ローカルな風景や文化があるからこそ、他者と交差したときの「違い」に気づき、それを語り合うことができる。

そしてこの往還は新たな気づきを創発し、過去のパラダイムを超えていくことを可能にする。顕在化している問題を解決するだけでなく、その背景にある根本的な真因を捉え、さらには飛躍的な新しいビジョンをもたらし得る。つまりは DX（デジタル・トランスフォーメーション）や GX（グリーン・トランスフォーメーション）、SX（サステイナブル・トランスフォーメーション）といった言葉に表される変革を実現し、その先でのイノベーション＝社会変容を可能にする。ビジネスの視点でいけば生産性を高め、事業としての成長を可能にし、また個々人の成長を大きく、確実に後押しする。

このレポートで扱うのは、そうした“ローカル⇄グローバル”の往還のプロセスである。重要なのは、どちらかを選ぶことなく、その間にある緊張や混ざり合い、そしてそこから生まれる可能性を見つめることである。

私たちの暮らしは、多かれ少なかれローカルに根差し、グローバルな影響を受けている。だからこそ、「あなたにとっての“ローカル”とは、どこにありますか？」という問いは、「あなたは今、どこから世界とつながろうとしているのか？」というもうひとつの問いでもある。

1.2 分析視点と方法論

本レポートは、2025 年 7 月に開催されたヨリミチ部のセッション記録を中心に構成されている。イベントでは、主催者によるファシリテーションのもと、多様な立場の登壇者と参加者がリアル・オンラインを越えて対話を交わした。使用言語は主に日本語と英語で、会場では字幕翻訳・QR コード意見入力など多言語対応の仕掛けが施されていた。

こうした対話をもとに、本レポートでは以下の三つの分析軸を採用した。

1.2.1 対話の構造化

参加者が交わした発言は、単なる意見や情報以上に、その人の背景・経験・価値観がにじみ出る「語り」だった。これらを時系列で捉えるのではなく、意味のまとまりとして分類・構造化し、どのような論点や価値観の交差が起きたのかを可視化した。

1.2.2 理論的枠組みの参照

この構造化の際には、いくつかの社会理論を参照している。

- **文化資本（ピエール・ブルデュー）**：人が持つ「話し方」「趣味」「態度」などの“文化的ふるまい”が、社会的関係性を左右するという視点。異文化間の交流において特に有効である。
- **SECI モデル（野中郁次郎）**：暗黙知と形式知を交差させる知識創造理論。個人の経験から場が生まれ、共有・創発・内面化を経て組織や社会の知へとつながる。
- **マインドセット論（キャロル・ドゥエック）**：固定型 vs 成長型の思考様式の違い。異文化・異価値観に向き合う柔軟性を育む指標となる。
- **システム思考（ピーター・センゲ他）**：個人や組織の課題を“構造”として捉えるフレーム。表層的な意見の背後にある繰り返されるパターンや無意識の前提を可視化する。

1.2.3 データとしての対話

今回は、定量的な調査ではなく、あくまで参加者の語りに現れた価値観や感情の動きを“経験知の集合”として捉えることを重視した。記録された言葉に加え、場の空気、非言語的反応、途中で生まれた冗談や沈黙にも注目しながら、分析と洞察を進めている。

1.3 用語と定義

本レポートで用いる重要な用語について、共通理解を深めるために定義を整理しておく。

ローカル

「ローカル」とは、単に地理的に“地元”であるという意味だけではなく、「自分の生活の中に根ざして、語ることができる経験」そのものを指す。それは町の名前かもしれないし、商店街の光景かもしれないし、心の中の帰属感かもしれない。ローカルとは、地図ではなく記憶とつながる概念である。

グローバル

「グローバル」とは、国家や英語圏を意味するのではない。他者との違いを実感し、自分の“あたりまえ”が相対化される経験のことを指す。したがって、グローバルな経験は海外渡航だけでは起きない。自分とは異なる視点と出会うたびに、人はローカルから“ずれ”、そこに学びが生まれる。

つながる／つなげる

「つながる」は自然発生的な接続であり、「つなげる」は意図的な媒介行為である。今回の議論では後者に着目し、誰がどのように人と人、文化と文化、地域と世界を“つなげる”存在になれるかが鍵となった。ファシリテーター、御節介役、あるいは偶然の出会いを生む“場のデザイン”もこの「つなげる」に含まれる。

楽しい（＝共感 × 発見）

「楽しい」とは、娯楽的な意味にとどまらず、共感と発見が重なるところに生まれる感情である。誰かとつながることで「わかる」瞬間と、自分でも気づかなかった「違い」に出会う瞬間。そのふたつが交差することで、“つながりの喜び”は生まれる。

2. ローカルに眠る価値

2.1 ローカルの本質：文脈資本と関係性の網

ローカルとは、単に“地域”を指す言葉ではない。その土地が持つ歴史や風土、人々の記憶、振る舞い、言葉遣い、生活習慣といったあらゆる要素が織り成す「文脈資本」こそがローカルの本質を形づくっている。そしてそれらは、“関係性”という網の目の中で意味を持ち、育まれていく。

港区で唯一の人力車運営者である田中氏は、東京というグローバル都市のただ中でローカルを体現している人物だ。彼の語りには、目に見える観光地ではなく、「人と人とのやりとり」の中にこそ価値が宿るという認識が通底していた。例えば、外国人観光客が東京タワーを訪れても、その場の景色だけではなく、「誰かに話しかけられ、少しの言葉を交わし、その街の“ふるまい”を感じる」ことが最も記憶に残ると彼は語る。

このような体験は、“物理的にどこにいるか”よりも“誰とどう関わるか”によってローカルの意味が立ち上がることを示している。人力車の移動そのものは数分～十数分の出来事だが、その中で交わされる雑談、笑顔、驚きの声は、まさに五感と感情が交差する「文脈体験」である。観光という非日常の中に、誰かの“あたりまえ”の日常が交差する瞬間に、ローカルの魅力が最も強く輝く。

また、山口氏が語ったエピソードは、“地理的移動”と“意味の再構築”というローカルのもう一つの側面を提示していた。彼はかつて福島県の限界集落に暮らし、のちに港区へ移住した経験を持つ。極端に人口密度の異なる二つの環境を行き来したことで、「地域とは“人の密度”ではなく、“つながりの濃度”だ」と語る言葉は非常に示唆的であった。

限界集落での暮らしには、顔が見える関係性や相互扶助といった“関係性の密度”が高かったが、それが都市に来ると一見希薄になる。しかし、彼は移住後も人との関係性を丁寧に紡ぎ直し、「都市にもローカルはある。むしろ意識して関係を育てなければ消えてしまうからこそ、意味のある営みになる」と語った。

これらの語りから浮かび上がるのは、ローカルとは“場所”以上に“関係性”と“文脈の連なり”によって生まれるということである。日常のふるまい、暮らしの中の風景、顔の見える会話。それらが結び合い、価値を持ち始めるとき、その土地にはじめて“物語”が生まれるのだ。

2.2 現代との接続と摩擦

ローカルが持つ固有の価値が見直されつつある一方で、それを現代の社会構造や経済活動と接続しようとしたとき、いくつかの摩擦も浮かび上がってくる。特に「ブランド化」と「情報格差」、そして「担い手不足」という三つの軸が、今回の対話の中で繰り返し言及された。

まず、ローカルの価値を「商品」として見せることへの葛藤がある。田中氏が語るように、「日本文化を体験したい」という観光客のニーズに応えるために人力車は多言語対応を進め、写真映えするルート設計なども行っているが、時にそれが「伝統の表面化＝記号化」に陥る危うさを感じることもあるという。例えば、「和風」や「日本的」とされる所作を演出するほど、本来の文脈や背景が希薄になっていく——そうしたジレンマに直面しているのは田中氏に限らない。

山口氏は、「地方の風景や祭りが“観光資源”として一人歩きするようになると、もともとの地域文化と齟齬が生じることもある」と指摘した。例えば、祭りの意義や準備の過程、地域内の役割分担といったプロセスが省略され、「見せ物」化することで地域内のモチベーションが下がる現象も報告されている。

また、情報へのアクセスや文化の“届け方”にも不均衡がある。アレックス氏は、日本各地の中小企業のグローバル展開支援に携わる中で、「地方の魅力は多いが、それを“翻訳”して世界に届ける人が圧倒的に少ない」と述べた。技術や文化はあっても、それを言語や表現として変換するインターフェースが不足しているという問題は、地域の発信力の差にもつながっている。

さらに深刻なのが、担い手の不在だ。高齢化と人口流出により、地域内で文化を継承する人材が減少していることは全国的な課題である。人力車においても、担ぎ手＝“語り部”となる人材の確保は容易ではないという。こうした構造的課題は、“ローカルの価値”を維持・再生産していくための基盤を揺るがすものでもある。

2.3 “私にとってのローカル”という感覚

「あなたにとっての“ローカル”とは、どこにありますか？」という問いに、登壇者それぞれが体験に根ざした答えを持っていたのが印象的だった。

アレックス氏は、「ローカルとはライフスタイルそのもの」だと語る。20年前にニューヨークから来日し、日本語を学びながら地域社会の中に少しずつ“居場所”を築いてきた彼にとって、「近所の定食屋で好物を注文し、常連として迎えられること」や、「商店街での立ち話」が何よりも“日本的なローカル”の体感だったという。「最初はすべてが異文化だったが、今では“東京のこの場所こそが、自分にとってのローカルだ”と胸を張って言える」と述べた。

一方、山口氏にとってのローカルは、「土地ではなく、顔の浮かぶ関係性」だという。かつて住んでいた限界集落では、ほとんどの住民の暮らしが見えていた。町内会の回覧板がまわる順番、畑の出来栄え、ゴミ出しの時間まで含めて、すべてが“その場所らしさ”を形づくっていた。港区に移ってからは、そうした関係性を“意図的に”作る必要があるという気づきがあった。「顔が見える」「話ができる」「頼れる」——これらが結びつくと、そこはたとえ大都市でも“自分のローカル”になるのだと。

田中氏は、「ローカルとは誇りを持って語れる日常」と語った。観光地をガイドする中で、海外のゲストに「あなたの好きな食べ物は？」「東京で好きな場所は？」と聞かれるたびに、自分の“ふつう”を見つめ直すようになったという。「何気ないことを誇りに思えるようになると、その場所は“他人に伝えたい場所”になる」。そしてそれが、まさに“ローカルがグローバルにひらかれる瞬間”なのだと。

登壇者たちの語りから見てきたのは、ローカルとは“物理的な座標”ではなく、“心の記憶と共有の欲望”によって形づくられるものであるということだ。そして、その感覚は誰にでもある。「その物語を、誰と、どう共有したいですか？」「その先にある“グローバル”は何を可能にしますか？」——本章で描かれた多様な“私のローカル”は、これらの問いに向き合うための、第一歩のヒントである。

3. 越境がもたらす問いと揺さぶり

3.1 外部との交差が生む可能性

ローカルが開かれるとき、そこには常に「外部」との出会いがある。地域の文化や暮らしが、異なる文脈を持つ人々と交わったとき、はじめてその土地の価値が可視化され、再構成される。これが“越境”の第一の意味である。

田中氏の人力車体験は、その象徴的な事例と言える。港区を訪れる外国人観光客は、東京タワーや増上寺といった「名所」そのもの以上に、彼の語りやふるまいを通じて“日本らしさ”を感じているという。たとえば、「どうして人力車に乗るのか?」「どんな歴史があるのか?」「日本人はなぜこんなに丁寧なのか?」という問いかけが交わされる中で、ローカルな文化は単なる背景ではなく、「相互に発見し合う場」へと変化していく。

アレックス氏は、このような出会いを「文化の翻訳」と呼ぶ。彼自身、外国人として地域に入り込む中で、「日本的ふるまい」を観察し、自らの言葉で“意味づけ”し直すプロセスを経てきたという。外国語としての日本語を学ぶのではなく、他者の価値観を理解する文脈として“暮らしの日本語”を体得した。これは一方向的な翻訳ではなく、「相互のローカルを持ち寄り、翻訳し合う対話」の体験である。

山口氏は、こうした文化的越境が経済的循環にもつながる可能性を語った。たとえば、地方で農業体験や神社式の結婚式を提供するプロジェクトでは、「ローカルな文化体験」が観光以上の価値を持ち、長期滞在や移住にもつながっているという。文化資源を“関係性の入口”にすることで、短期的な消費ではなく、長期的なつながりや信頼の構築へと進化する構図が見えてくる。

つまり、越境とは単なる異文化体験ではない。ローカルに外部が触れることで、そこに眠っていた価値が発見され、言葉になり、他者との接点となっていく。その過程において、ローカルとローカルはつながり、個人と社会のあいだで新しい循環が生まれる。

3.2 つながることへの怖れと抵抗

他方で、ローカルとグローバルの接続は、常にスムーズなわけではない。越境には期待とともに、戸惑いや摩擦、そして潜在的な拒絶も伴う。

まず顕著だったのは、「言語への不安」である。アレックス氏は、来日当初「話しかけても意味が伝わらないのでは」と感じ、自分の日本語に対する“申し訳なさ”が常につきまといっていたと語る。こうした心理的負荷は、実は日本人側にも存在する。対話の中では、「英語が話せないから外国人と関われない」と感じている参加者の声も多く挙がった。

これは単なる語学力の問題ではない。言語を“伝える手段”ではなく、“正しくなければならぬ技術”と捉える社会の風潮が、無言のプレッシャーを生み出している。田中氏も「間違えた英語を話すくらいなら、話さない方がマシだと思っていた時期がある」と振り返った。しかしその意識こそが、ローカルと外部との接続を阻む“無意識のバリア”になっている。

また、文化そのものが“摩耗”することへの恐れも顕在化していた。とくに田中氏のように文化体験を仕事にしている立場では、「外国人向けの演出が“本物”を損なっているのではないか」という内的葛藤がある。「日本文化らしさを説明しすぎると、逆にリアリティが薄まる」「写真映えを意識しすぎると、日常の魅力が消える」——こうした声は、「伝えること」と「守ること」の間で揺れる現場のリアルを物語っている。

さらに、山口氏が挙げたのは“観光公害”の問題だ。たとえば富士山や京都の一部地域では、観光客の急増による混雑・騒音・ごみ問題が深刻化しており、「もはや地元の人が近寄らない観光地」が増えていると指摘されている【朝日新聞, 2024】。このような現象は、“つながる”ことの限界や、そのマネジメントの難しさを浮き彫りにしている。

人がつながるとき、必ずしも善意だけが交差するわけではない。無理解、不均衡、疲弊——そうした影もまた、越境の現場には存在している。そのことを無視したまま「グローバル化は善」と語ることの危うさを、今回の対話は丁寧に掘り起こしていた。

3.3 マインドセットの越境——“違い”の中で再構築される自分

越境の最大の価値は、他者との違いを通じて「自分自身を再定義する機会」にある。田中氏は、観光客との対話のなかで何度も「日本文化って何ですか？」と問われた経験を語った。初めは困惑したが、その問いに答えようとするうちに、自らが当たり前に行ってきた所作やふるまいに意味を見出すようになったという。たとえば、挨拶の仕方、道案内の姿勢、時間の感覚——それらすべてが「文化」であり、「私自身のローカル」でもあると気づいた瞬間に、彼の中で“日本文化”が内面化されたのだ。

アレックス氏は、自身のマインドセットの変容をこう語った。「最初は“わからないこと”ばかりだった。でも、それが“楽しいこと”に変わるタイミングがあった」。それは、自分と相手の間にある違いを“乗り越えるべき壁”ではなく、“話題になる素材”として受け入れられたときだった。「文化の違いを共有できた瞬間、自分のアイデンティティが“孤独”ではなく“多様性の一部”になったと感じた」と述べている。

山口氏は、ローカルとグローバルの行き来を「自分というシステムの再調整」と表現した。都市と田舎、地域社会と匿名性、密接な関係性と距離感あるつながり——それぞれの文脈において、自分のふるまいや価値観を調整してきた経験は、「誰と、どこで、どうつながるか」を考える力につながっているという。

こうした経験は、マインドセットの越境である。他者とつながることで「自分が揺れる」。その揺れを経て、人は「自分のローカル」に新しい定義を与えることができる。

このように、“違い”に出会い、“違い”を受け入れ、“違い”の中で自分を再構築するプロセスそのものが、ローカルとグローバルの接続が生む最大の価値である。そしてそれは、特別な教育や言語力ではなく、誰もが持つ「好奇心と許容性」のなかから始まる営みだ。

4. つながった先に見える風景

4.1 多中心ネットの台頭：メッシュ型世界観

「ローカルとグローバルをつなぐ」という発想が、これまでのような“中心と周縁”のモデルではなく、複数の拠点が網目のように結びつく「メッシュ型」のネットワークとして捉えられ始めている。これを象徴する事例が、長野県の野沢温泉（Nozawa Onsen）における変化だ。

かつては典型的な“スキー観光地”だった野沢温泉は、地元資本による再投資や宿泊施設のリノベーション、外国人居住者との協働によって、単なる観光消費地から“多文化生活圏”へと変貌しつつある。たとえば、英語対応のインフォメーションセンター、地元食材を使った料理教室、多言語での雪かき体験など、単なる観光ではない“暮らしの共有”を軸にしたプログラムが展開されている【野沢温泉村観光協会, 2024】。

このような動きは、観光客と住民の境界を曖昧にし、「訪れる人」と「暮らす人」を織り交ぜる“共住”のあり方へと接続している。結果として、地域は一時的な経済波及にとどまらず、文化的多様性を内包しながら持続的に循環する“メッシュノード”として再定義されている。

港区でもその兆しがある。アレックス氏が主催する「歩くダイアログツアー」は、東京タワーや芝公園周辺をゆっくりと歩きながら、外国人と日本人が言語を交えつつ、お互いの暮らしや価値観を語り合う取り組みである。特別な施設や演出はない。必要なのは、歩くこと・語ること・聞くこと——つまり身体を通じた“接続のインフラ”だけだ。

このツアーでは、東京のような都市の中でも「関係性の拠点」が生まれることが確認されている。芝公園、増上寺、商店街のベンチ——それらは単なる場所ではなく、語りが生まれる“ローカルの窓”となる。

こうした動きは、今後「どこが中心か」ではなく、「どの拠点が他者と接続可能か」が問われる時代への転換を意味する。世界は“ハブとスポーク”から“メッシュとノード”へ——地域は「一つの拠点として世界と関係する」ための力を持ち始めている。

4.2 ハイブリッド文化の創造

ローカルとグローバルが接続されるとき、文化の“混ざり合い”が始まる。そこには単なる「伝統の保護」や「異文化理解」を超えた、第三の文化＝ハイブリッド文化の創造がある。

たとえば、田中氏が関わった和洋折衷の結婚式プロジェクトでは、神前式と西洋式の要素を掛け合わせ、日本の神社でドレス姿の新婦が参進し、英語の牧師が祝辞を述べる場が演出されたという。こうした形式に対しては「伝統を壊している」という意見もある一方で、「形式ではなく想いを形にしたい」という当事者の希望に寄り添った結果、新たな文化実践が生まれている。

アレックス氏は、自身の結婚においても同様の体験をした。日本の神社での式、アメリカのDJを呼んでのナイトパーティー、そしてパリでのフォトセッション——これらは一見すると“バラバラ”な選択だが、彼にとっては「人生の各ローカルを接続し、物語として束ねるための儀式」だったという。

食の分野でもハイブリッド化は進んでいる。対話の中では、「世界の漬物レシピを交換するピクルス・スワップイベント」などのアイデアも飛び出した。地域の保存食というローカルな文化が、グローバルな味覚と交差することで、新しい食体験が生まれ、そこに「誰かの思い出」や「故郷の記憶」が重なる。

さらに、歩行という身体的行為を介した“文化の横断”も注目に値する。歩くことは、移動であり観察であり、対話の速度を落とすことで生まれる“気づきの装置”でもある。田中氏やアレックス氏が重視する「歩きながら語る」という営みは、まさにローカルの中にグローバルな視座を取り込み、文化の混成と再発見を促す方法として機能している。

ハイブリッド文化とは、単なるミックスではない。それは「複数の文脈が矛盾なく共存し、互いを高め合う文化状態」であり、“日常のデザイン”を更新する創造行為でもある。

4.3 新しい社会の条件

では、こうした文化の往還や共創を日常的に持続させる社会とは、どのような条件を満たしていなければならないのか。参加者の語りと実践から浮かび上がったのは、以下の三つの観点だった。

第一は、「**心理的国境の越境**」である。これは、物理的に移動することではなく、「相手と違っていても大丈夫」「自分の普通を疑ってもいい」と思える内面的な余白のことだ。田中氏は、英語を話すことに最初は強い抵抗があったが、「間違っても笑ってくれる人と接して初めて、気が楽になった」と語った。逆に言えば、笑い合える“文化的安满地帯”がなければ、どんなに制度や技術が整っていても人はつながらない。

第二は、「**文化の相互継承**」が可能であること。つまり、“教える側”と“学ぶ側”が固定されず、お互いに自文化の文脈を翻訳し、共有し合える状態である。アレックス氏は、日本文化を“学ぶ”立場だった自分が、今では逆に「どうすれば伝えられるか」を日本人に問われる側になったという。その移行は、文化を「知識」ではなく「関係性の中で更新される経験」として捉える重要な視点を提供している。

第三は、「**Well-being を共通言語とする社会設計**」である。山口氏は「文化は楽しくなければ続かない」と言い切った。地域文化の継承や観光の場づくりも、義務感や地域振興の手段としてではなく、「人が楽しく関われる」状態でなければ本質的には続かない。最近では“文化資本”を幸福感や主観的充実度と組み合わせて評価する動きも出てきており、今後は「地域の豊かさ」そのものの定義が変わる可能性がある【OECD, 2023】。

これらの条件が満たされてはじめて、「つながり」は一過性ではなく、日常の中に根ざした“文化的レイヤー”として機能する。その結果、ローカルとグローバルの往還は、単なる移動や取引ではなく、共感と発見が循環する“持続可能な社会基盤”へと進化していく。

5. 価値を橋渡しするしくみ

5.1 余白と受容の設計

どれだけ優れたアイデアやプログラムがあっても、人と人、人と文化がつながるためには「安心して揺らげる場」が必要である。今回のヨリミチ部でも、多くの発見が生まれたのは、発言を強制されず、失敗を許容する空気に満ちた“ゆるやかな対話空間”だった。

このような空間は、システム理論や組織開発の分野では「White Space（ホワイトスペース）」と呼ばれる。ホワイトスペースとは、明確な指示や目標が存在せず、意味づけが未決定な余白のことだ。そこには自由度がある一方で、不安定さも含む。だが、この余白こそが「問いが芽生え、試行錯誤が許される起点」として機能する。

アレックス氏は、このホワイトスペースの重要性を“言語”の体験から語った。彼にとって日本語は「完璧であるべきもの」ではなく、「通じるか通じないかを試しながら育てていくもの」だった。だからこそ、「うまく言えなくてもいい」「間違えてもいい」という空気がある場において、人は安心して異文化と接続できるのだと。

また、田中氏が案内する人力車のサービスでも、「観光ガイドではなく“雑談”を大事にしている」と語った。ガイド台本ではなく、お客との関係性の中で言葉を“即興的に編んでいく”ことで、場は安心と発見に満ちる。これはまさに、“正解のない余白”が、人と人を橋渡しする媒体になっている事例である。

このようなホワイトスペースを組織や地域に設計するには、「形式的なルールの最小化」「試作と実験の容認」「即時評価の棚上げ」といった実務的配慮が不可欠だ。そこに“共感的聴取”が加わることで、対話と学びが自然に回り始める。

5.2 ローカルの媒介者＝コンダクターの育成

ローカルとグローバル、個人と組織、文化と経済——これらを橋渡しするには、単なる通訳やマネージャーではなく、「文脈を翻訳し、関係性を指揮できる人材＝コンダクター」が必要になる。

今回の対話でも、田中氏、山口氏、アレックス氏は、それぞれの立場で異なるコンダクターシップを体現していた。田中氏は、海外観光客に日本文化の“肌感”を届けるインタープリターであり、山口氏は都市と地方を行き来する“文脈間の架橋者”であり、アレックス氏は言語・文化・ビジネスを横断する越境的実践者である。

このような存在は、システム内の“ノード”として情報と感情を媒介し、構造間のずれを吸収・翻訳する力を持つ。その役割は、以下のように整理できる。

- **翻訳者 (Translator)**：価値観や文化の背景を他者に伝わる形に変換
- **媒介者 (Connector)**：人・場所・テーマを横断的につなぐネットワークカー
- **触媒者 (Catalyst)**：対話や共創を生み出す空気とタイミングを設計

これらの要素を兼ね備える人材は、偶然に現れるのではなく、意図的に育てられる必要がある。そのためには、次のような施策が有効だ。

- **二拠点型育成制度**：都市と地方、企業と市民社会を往還する人材の育成プログラム
- **御節介ラボ／キュレーター養成講座**：地域のつなぎ手として、リスニングスキルやプロジェクト設計力を身につける場
- **越境体験の記述と内省**：文化的な“摩擦”を日記やワークシートで振り返る習慣づけ

とくに山口氏が語った「意図的に関係性をつくること」は、都市においては見落とされがちなスキルである。「挨拶をする」「名前を覚える」「話すきっかけを用意する」——これらの地味な行為の蓄積が、つながりの文化土壌を耕していく。

5.3 接続のツール群：低ハードル化の鍵

関係性をつくるためには、“思わず関わりたくなる”ような入口が必要だ。言語力や専門知識、文化理解といったハードルをいかに下げるかが、ローカルとグローバルを橋渡しするうえで重要な設計課題となる。

その具体策の一つが「Phrase Pack (フレーズパック)」の活用である。これは、現場でよく使う会話や所作を、多言語で、かつ文化的背景とともにまとめた簡易ガイドブックのようなもので、アレックス氏はこれを観光接客や地域交流の現場で導入してき

た。「正しい文法ではなく、通じるかどうか」「意味だけでなく、雰囲気伝えること」——そうした発想の転換が、会話のハードルを下げる。

また、共通の趣味や身体感覚を介した接続も強力である。たとえば「食」は、世界中で最も共有されやすい“関心のインフラ”だ。漬物の交換、手料理の持ち寄り、調味料の話などは、言語や宗教を越えて人々を結びつける。田中氏が紹介した「何食べた？」という話題が一気に場をなごませた場面は、まさにその象徴である。

加えて、歩くこと・つくること・遊ぶことといった「身体を通じた共同体験」は、言語化が難しい信頼を醸成する装置となる。芝公園でのウォーキング・ダイアログも、そこに“訳さなくても通じる共感”があったからこそ成立していた。

さらに、AI ナビゲーションの可能性もある。たとえば、外国人向けに“おすすめの会話スタート”を提案してくれるツールや、話題に応じた翻訳ガイドを表示するアプリケーションなどが、今後の共創環境の支えとなるだろう。

5.4 小さな共創を回す：マイクロプロジェクト運営

人と人、文化と文化が出会った先に、“一緒に何かをやってみる”という共創のステップがある。これを無理なく始める方法として注目されているのが、マイクロプロジェクト（小規模・短期間・低予算）の運営手法である。

アレックス氏は、港区のイベントで「ピクルス文化交流会」なる試みを紹介した。内容はシンプルで、「自国の漬物を1つ持参し、簡単なレシピとその思い出を共有する」というもの。これにより、言語や国籍を問わず“自分のローカル”を持ち寄る場が生まれた。

こうしたプロジェクトにはいくつかの共通点がある。

- **自己完結性**：数人～十数人規模で、1回完結型でも成果が得られる設計
- **可視化と記録**：写真、メモ、投稿などによって他者と“ストーリー共有”が可能
- **再現可能性**：他地域や他コミュニティに展開できるテンプレート構造
- **資金調達の簡便さ**：1万円単位のクラウドファンディングやコミュニティ投資など、小口・分散型支援との相性が良い

田中氏も、人力車を活用した「まちの語り部体験会」を構想しており、外国人参加者に地域住民がガイドを行い、その後に地元商店で一緒に買い物をするというものだった。こうした“物語と日常が交差する場”は、観光でも福祉でも教育でもない、第三の領域＝“関係資本づくり”として機能する。

このようなマイクロ共創を継続的に回すには、次のような仕組みが有効である。

- プロジェクト成果をシェアするオンラインギャラリーの設置
- 簡易レポートテンプレートによる参加者の声の可視化
- 「次の人へバトンを渡す」ような、リレー型の企画運営

こうして「やってみた→語った→つながった」というサイクルが生まれれば、文化や関係性のレイヤーは徐々に積み重なり、“つながる社会”は自然と育っていく。

5.5 信頼とリスクの両立

つながりのデザインは、同時に“境界の設計”でもある。文化の違いや個人の背景が交差する場では、誤解・摩擦・偏見といったリスクも常に潜んでいる。

特に懸念されるのは、**文化的誤解**である。「これは本物の日本文化なのか？」「伝統を壊していないか？」という問いが、交流の中でしばしば浮上する。こうした葛藤は、“伝える側”と“受け取る側”の期待値のズレから生まれる。翻訳や解説の仕方に“余白”を残すこと、相手に解釈を委ねる姿勢が鍵となる。

次に、**データやプライバシーへの配慮**も重要である。イベント記録や参加者の写真をSNSで共有する際、参加者の承諾を得るプロセスを丁寧に設計することが信頼の基盤となる。

また、**観光客と住民の摩擦**にも注意が必要だ。混雑・マナー違反・騒音などは、ローカルの生活と外部との接点に発生する典型的なリスクである。事前のルール共有や双方向のフィードバックシステム、場合によっては「制限付き共創」の導入など、柔軟な運用が求められる。

“つながる”とは、開くことでもあるが、守ることでもある。そのバランスをとるガバナンスと合意形成こそが、社会的橋渡しを持続可能にする条件なのだ。

6. 物語を“わたし”のものにする

6.1 個人ができることから始める

「ローカルとグローバルをつなぐ」という大きなテーマは、壮大に見えるかもしれない。しかし、つながりはいつも“一人の誰か”が動くところから始まる。ここでは、個人がすぐに実践できるいくつかのアクションの事例を紹介する。

最初に取り上げたいのは、アレックス氏が実践している「日本語禁止ウォーク」だ。これは、地域を散歩しながら、あえて母語（日本語）を使わずに、身振り手振りや英語で会話するというもの。港区で行われているこの活動には、外国人と日本人が交じり合い、言語の壁にぶつかりながらも“伝わること”の喜びを体験する場となっている。

言語という“正しさ”の枠を外すことで、人は「伝えたい」という本能的な感情に立ち返る。参加者の多くが「単語が通じなくても笑い合えた」「翻訳アプリより表情で分かり合えた」と語っていたのが印象的だった。このような身体感覚を伴う体験は、つながりを“知識”ではなく“経験”として残す。

次に有効なのは、SNSを活用した「自分のローカルストーリーの発信」である。観光地での体験ではなく、自分の町の一角、好きな食べ物、祖父母との会話といった“自分しか語れない日常”を写真や短文で投稿する。それだけで、誰かが「いいね」を返してくれたり、「その場所に行ってみたい」と言ってくれたりする。

こうした共有の積み重ねは、自分の暮らしを他者の目線で見直すことにつながる。田中氏が「人力車のお客さんに“東京で一番好きな場所はどこですか？”と聞かれて、初めて真剣に考えた」と語っていたように、“誰かに伝える”という行為は、自分自身への問い直しでもある。

最後に、自分の内面と対話する「自己内省ワーク」も重要だ。これは、紙に書く、音声で録音する、AIに語りかけるなど、形式は何でもいい。「最近出会った“違う”と感じたこと」「自分が“誇れる”と思えた瞬間」「他者とつながって“面白かった”体験」などを記録するだけでも、“自分の物語”が形になりはじめる。

どれも特別なスキルは要らない。必要なのは「試してみる」こと。そして、自分の言葉で語ってみること。そうすることで、つながりの“起点”は、誰にでも開かれている。

6.2 コミュニティと組織に宿る変容の種

個人が動き出したとき、次に必要になるのが「つながりを育てる仕組み」である。それは制度というほど堅苦しいものではなく、“ふだんの関係性に種をまく”ような小さな工夫や仕掛けでよい。

その一つが「Connector Map（コネクターマップ）」である。これは、地域内や組織内で“誰が誰と誰をつなげているか”を可視化するもので、山口氏の提案から生まれたアイデアだ。たとえば、学校の先生が地域の祭りの主催者を紹介し、その人が商店街の店主につないでいくといった“人の網の目”を地図化していく。

この作業をするだけで、「意外と自分がつなぎ手だった」「あの人を紹介したのが自分だった」といった“媒介者”の自覚が生まれ、コミュニティ全体のつながり意識が強まる。また、コネクターマップはイベント設計やプロジェクトチーム編成のベースとしても活用できる。

もう一つは「二枚目名刺」の導入である。本業とは別に、地域活動や趣味のプロジェクトにおける肩書きを持つことで、自分の多面的な価値を言語化しやすくなる。たとえば「平日は IT エンジニア、週末はご近所ツーリズム研究家」といった具合だ。

アレックス氏も、自身の SNS や名刺に“Local Bridge Builder”という肩書きを入れており、「そう名乗ることで、自分の振る舞いも変わった」と語っていた。肩書きが行動をつくり、行動が関係性を広げる。この循環が、組織の中にも“越境人材”を生み出す。

さらに、「マイクロスポンサー制度」も注目に値する。これは、1,000 円～10,000 円程度の少額支援を集めて、地域や NPO の小規模活動を応援する仕組みだ。金銭的なハードルを下げることで、応援者の裾野が広がり、「関わる人が増えることで継続性が高まる」という好循環が生まれる。

田中氏の人力車体験イベントも、地元の飲食店や小規模事業者の協賛で運営されている。「大きなスポンサーはいないけれど、“ちょっと応援したい”人が集まることで、みんなのプロジェクトになる」と語っていたのが印象的だった。

制度をつくることが目的ではない。関係性を生み出す“種”を、組織やコミュニティの中に埋め込んでおくこと。その積み重ねが、つながりの文化を耕していく。

6.3 “楽しい”から動き出すために

どんなに意義があっても、つながりは「楽しくなければ続かない」。これは田中氏の言葉であり、同時に今回のセッション全体に通底していたメッセージである。

「楽しい」とは、単なる娯楽や消費のことではない。人と人が“違い”に出会い、驚きや笑いを共有し、「また会いたい」と思えるような時間のことだ。そこには、好奇心、安心感、発見、共感といった感情が絶妙なバランスで存在している。

この「楽しい」を設計するうえで鍵になるのが、「好奇心のドライブ」である。たとえば、「世界のピクルス事情を調べてみる」「外国人観光客に“日本の変なルール”を聞いてみる」といった、自分が面白がれるテーマを起点にしたプロジェクトは、自然と人を巻き込む。

また、「文化を共有する仕掛け」も重要である。歩行型のダイアログイベント、料理レシピの交換、趣味のワークショップなどは、参加者に“情報”ではなく“体験”を提供する。アレックス氏は、「一緒にピクルスを漬けたら、もう友達だよ」と笑っていたが、その言葉の裏には“共創による信頼形成”という本質がある。

これらの活動を支えるためには、評価指標（KPI）も“数字”だけでなく“実感”に寄り添った設計が必要だ。「何人来たか」よりも「どんな会話があったか」「誰が誰とつながったか」「どんな感情が共有されたか」。こうした質的な KPI をチームで共有し合うことで、プロジェクトが“続く理由”になる。

最後に、「“楽しい”は正当な戦略である」という考えを、私たちはもっと大事にすべきだ。「笑っていい」「遊んでいい」「偶然を楽しんでいい」——この許可があるだけで、人は安心して“誰かとつながる一歩”を踏み出せる。

楽しいから始めていい。むしろ、それこそが最も力強く、持続可能なつながりの起点になるのだ。

7. つながりを経営させるために

7.1 核心の再確認——“文化”と“関係性”の再定義

このレポートを通じて繰り返し浮かび上がってきたのは、「文化」と「関係性」をどのように再定義するかという問いである。私たちは、文化を“守るべき静的なもの”として語りがちだ。しかし、実際の現場では文化は“編まれ、ほどかれ、また編まれていく動的なプロセス”として存在していた。

田中氏が語ったように、「誰かに伝えようとすることで、初めて自分の文化が立ち上がる」。つまり、文化とは自己完結的な知識ではなく、「誰かとの関係の中で形づくられる意味の束」なのである。これは、アレックス氏が自身の結婚式で経験したような、複数の文化が混ざり合う実践の中で顕著だった。「何が正統か」ではなく、「どうしたら大切な人と共有できるか」という視点が、文化を未来へと運ぶ鍵になる。

そしてもう一つの鍵は「関係性」だ。山口氏の言葉を借りれば、「関係性とは、顔の浮かぶつながり」であり、それは場所や制度に依存しない。むしろ、関係性は“意図的につくる”ものであり、その実践が“ローカルの文化”を再定義していく。

文化と関係性を“つながりの回路”として再定義するとき、ローカルとグローバルの境界は溶け、そこにあるのは「ひとりの生活者が他者と出会い、自分を編み直していくプロセス」なのだとわかる。その編み直しが生まれる“余白”と“場”をどのように社会の中に残していくかが、これからの時代の課題である。

7.2 今後の展望と問いの継続

2025年の今、日本社会は大きな節目に立っている。人口減少、地域の空洞化、過剰な観光と排外的傾向——これらの課題に対し、「つながること」は万能の解決策ではない。しかし、「つながる力の質を高めること」こそが、私たちができる最も根源的な社会変革へのアプローチである。

本レポートでは、制度や技術の話よりも、“関係性を耕す人の存在”と“文化を共有する場のデザイン”に重心を置いた。これは、効率ではなく「意味」、利益ではなく「物語」をベースにした社会のあり方を模索する試みでもある。

問いはまだ終わらない。むしろここからが始まりである。

「あなたにとっての“ローカル”とは、どこにありますか？」

「その物語を、誰と、どう共有したいですか？」

「その先にある“グローバル”は、何を可能にしますか？」

この三つの問いを、それぞれの場所、それぞれの関係性の中で持ち帰り、編み直し、語り合ってほしい。つながりは、言葉と実践のあいだで、静かに育っていく。

7.3 このレポートを読んだあなたへ

このレポートに書かれているのは、何も“特別な人たち”の話ではない。今日から、あなたもまた「つなぐ人」になることができる。

大事なことは最初の一步を踏み出すこと、小さな行動を始めること。たとえば、いつもと違う道を歩いてみる。近所の店主に話しかけてみる。外国から来た人に“こんにちは”と挨拶する。自分の好きな場所を SNS で紹介してみる。そんな「寄り道」から、物語は始まる。

つながることは、勇気ではなく、習慣である。どうか、あなたの“ローカル”をひらき、世界とやさしく出会ってほしい。そしてその物語を、ぜひわたしたちと、多くの方たちと、共有してほしい。

このレポートが、一人ひとりの“楽しい”から始まる未来づくりにつながることを願って。

巻末資料：参考資料・文献一覧

1. 統計・制度情報（政府・国際機関）

- 観光庁（2025）．訪日外国人旅行者数 2024 年 年間速報値.
https://www.mlit.go.jp/kankocho/news02_000368.html
- OECD（2023）．*Measuring Well-being and Progress: Understanding the Social and Cultural Dimensions*.
<https://www.oecd.org/statistics/measuring-well-being.htm>
- 総務省統計局（2024）．地域の人口動態に関する年次統計.
<https://www.stat.go.jp/data/>

2. 事例・プログラム・実践知

- 野沢温泉観光協会（2024）．地域再生に向けたインバウンド・コミュニティ戦略.
<https://nozawakanko.jp>
- ピクルス文化交流会（Alex 氏 実践事例, 2024）．港区産業振興センター内イベント記録より。
- 芝公園ウォーキング・ダイアログ（港区 × Creative Guild, 2024-2025）．
<https://creativeguild.jp/>
- 和洋折衷婚礼事例（田中氏体験共有, 2024）．レポート内セッション発言記録に基づく。

3. 理論・学術文献（主要引用）

- Pierre Bourdieu（1979）．*Distinction: A Social Critique of the Judgement of Taste*.
（邦訳：ピエール・ブルデュー『ディスタンクシオン』藤原書店, 2005 年）
- 野中郁次郎・竹内弘高（1996）．『知識創造企業』日本経済新聞社.
- Carol S. Dweck（2006）．*Mindset: The New Psychology of Success*.
（邦訳：キャロル・S・ドゥエック『マインドセット』草思社）
- Peter Senge（1990）．*The Fifth Discipline: The Art and Practice of the Learning Organization*.
（邦訳：ピーター・M・センゲ『学習する組織』英治出版）
- 山崎亮（2012）．『コミュニティデザイン』学芸出版社.

- フィリップ・コトラー（2010）．『マーケティング 3.0』朝日新聞出版.
（価値共創や文化接続の観点で文脈補完的に参照）

4. 関連デザイン・システム思考フレーム

- Donella H. Meadows（2008）．*Thinking in Systems: A Primer*.
（邦訳：ドネラ・メドウズ『システム思考入門』英治出版）
- Otto Scharmer（2009）．*Theory U: Leading from the Future as It Emerges*.
（邦訳：オットー・シャーマー『U 理論』英治出版）
- マイケル・ウェード 他（2021）．*Digital Vortex*. IMD 発行.
（文脈翻訳の例として参照）

5. 参考ウェブ資料・メディア記事

- 朝日新聞デジタル（2024 年 8 月）．富士山の観光規制強化、現地住民の声.
<https://www.asahi.com/articles/ASR8H5T04V8HUTIL00.html>
- The Guardian（2024）．*Japan's overtourism problem grows as visitors flock post-Covid*.
<https://www.theguardian.com/world/2024/jul/05/japan-faces-new-overtourism-crisis>